МЕТОДИКА ВИКЛАДАННЯ ЯПОНСЬКОЇ МОВИ

О. Асадчих,
Київський національний університет
імені Тараса Шевченка

タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学における東洋言語・文学の専攻のカリキュラムの問題点とその対策の一例
(Навчальний план підготовки студентів спеціальності «Східна мова та література» у Київському національному університеті імені Тараса Шевченка: проблеми та шляхи їх розв'язання)

Проаналізовано проблеми навчального плану спеціальності «Східна мова і література» Київського національного університету імені Тараса Шевченка та запропоновано шляхи їх вирішення.

***Ключові слова**: мотиваційний фактор, історія японістики в Україні, предмети основної спеціальності, загальноосвітні предмети.*

Проанализированы проблемы учебного плана специальности «Восточный язык и литература» Киевского национального университета имени Тараса Шевченко и поданы пути их решения.

***Ключевые слова**: мотивационный фактор, история японистики в Украине, предметы основной специальности, общеобразовательные предметы.*

The problem moments in the curriculum of specialty «The Oriental language and literature» of Kyiv national Taras Shevchenko university are analyzed. The ways of solving are proposed.

***Key words**: factor of motivation, the Japanese teaching developing, the subjects of the first language, the list of subjects of the secondary school.*

現在、ウクライナにおいて外国語教育の重要性がますます上がりつつある。日本語もその外国語の中でひとつの外国語であるが、ウクライナでは外国語といえば、一般に西洋言語のことを指す。そのため、現状として外国語というカリキュラムは西洋言語を基にして作成されている。これはすべての東洋言語教育、あるいは日本語教育の場合も例外ではない。その詳細について考える前、ウクライナにおける日本語教育事情を紹介する。

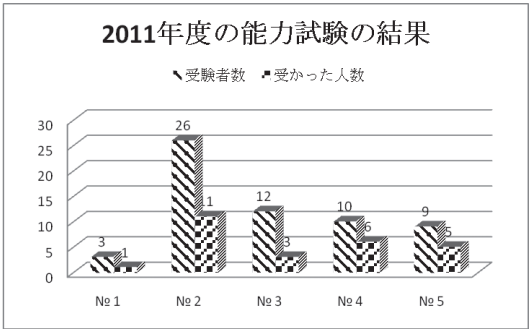
ウクライナにおいて日本語教育が行われているのは、キエフを初めとして、リビーフ、ハリコフ、ドニエプロペトロフスク、ルガンスク、オデッサ、ミコラエフの７都市である。高等教育機関のみならず、初等、中等教育機関、および、専門学校や私塾でも日本語教育が実施されている。

日本語教育が行なわれている機関の中でも、筆者の所属するタラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学（以下、「キエフ国立大学」）は、特に、ウクラ

イナにおける日本語教育において主要な役割を果たしてきた。1972年ウクライナでは初めて、日本語が高等教育機関における第二外国語として教えられ始めた。そして、1991年のウクライナの独立後、キエフ国立大学に東洋学部が設立され、本国で初めて、日本語を主専攻として学べるようになった。同大学では2002年、2004年の2度の学部組織のをて、現在は「中国語・韓国語・日本語学科」において日本語を主専攻で学ぶことができる[Асадчих 2004, 1] 。筆者は、ウクライナの日本語教育において主要な役割を担うキエフ国立大学の日本語・日本文学の専攻のカリキュラムの改善を行なうことは、ひいては、ウクライナの日本語教育のあり方を考え直すための問題提起ができるのではないかと考えている。

カリキュラムの改善を研究テーマにしたきっかけは二つのことから成り立っている。一番目のことはキエフ国立大学の日本語の学習者の能力試験の結果である。二番目のことは、日本の文部科学省が行っている日研生試験の結果である。まず、2011年度の能力試験の結果を見てみよう。

グラフ1



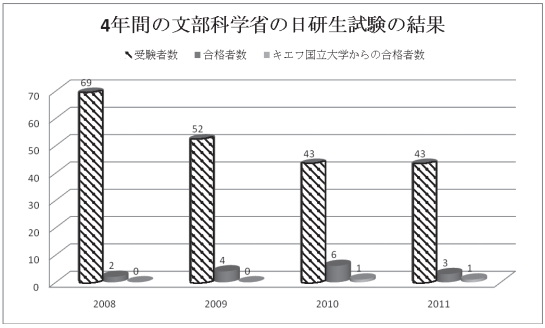
2011年の受験者数は60人だった。そのなか、1級の受験者は3人で、2級の受験者は26人で、3級の受験者は12人、4級は10人、5級は9人だった。結果を見てみると以下のようになっている。1級に受かった人は1人で、2級は11人で、3級は3人、4級は6人、5級は５人だった。というのは合計の60人の中で受かった人は26人しかいない。

同じように2008年と2011年の間、つまり4年間の文部科学省の日研生試験の結果である。グラフに示すと次のようになる。

2008年度の試験では受験者は69人で合格者は2人であった。その中はキエフ国立大学の学習者が一人もいなかった。2009年度の試験では受験者は52人で合格者は4人であった。その中はまたキエフ国立大学の学習者が一人もいなかった。2010年度の試験では受験者は43人で合格者は6人であった。その中はキエフ国立大学の学習者が一人であった。2011年度の試験では受験者は43人で合格者は３人であった。その中はキエフ国立大学の学習者が一人であった。

以上の結果を踏まえ、また他の教育機関の受験結果と比較し、キエフ国立大学のカリキュラムの改善を研究することにした。

グラフ2



さて、まずキエフ国立大学のすべての言語教育の特徴ですが、言語学院の卒業者にアカデミックな知識を身につけさせることを目的としてカリキュラムを作成するということである。具体的に言うと、卒業証書の専攻は、日本語・日本文学の教師、日本語通訳者、英語教師、英語通訳者、言語・文学研究者、つまり五つの分野の専攻になっている。そのため、カリキュラムには主専攻に関する科目以外に、普通教育関係の科目が41パーセントを取る形である。また、ウクライナの教育制度の場合、特別な基準があり、ウクライナの教育省は決まった科目を主科目にし、残りの科目はそれぞれの教育機関が自分なりに定める形を取る。その詳細を見てみよう。

学士専攻（四年間）の科目の一覧

教育省が決める普通教育関係主科目

1）ウクライナ語
2）ウクライナ歴史
3）ウクライナ文化歴史
4）哲学
5）心理学
6）政治学
7）論理学
8）社会学
9）異文化コミュニケーション
10）美学
11）経済学
12）法律学
13）教育学
14）最新情報技術
15）生態学

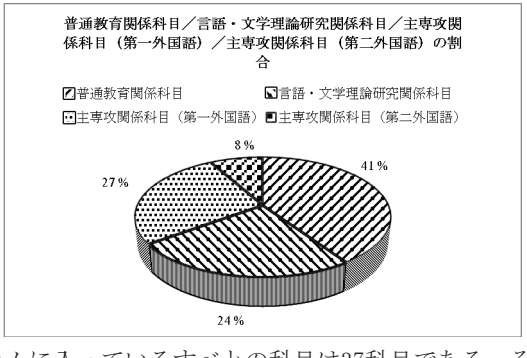
合計：15科目

言語・文学理論研究関係科目

1）言語学入門
2）学術研究基礎

3)　東洋言語学入門
4)　通訳論入門
5)　文学論入門
6)　ウクライナ文学
7)　ラテン語
8)　言語コミュニケーション論基礎
9)　西洋文学史
合計：9科目
主専攻関係科目　（第一外国語）
1)　日本語
2)　日本語の音声学
3)　日本語史
4)　日本語の文法論
5)　日本語の文体論
6)　日本語の語彙論
7)　日本の言語地理学
8)　日本語の通訳技術
9)　日本語教授法
10)　日本文学（時代別）
合計：10科目
主専攻関係科目　（第二外国語）
1)　英語
2)　英語の通訳技術
3)　英語の言語地理学
合計：3科目
カリキュラムに入れてある科目の割合をグラフに示してみよう。

グラフ3



カリキュラムに入っているすべとの科目は37科目である。その中では
普通教育関係科目は41%、言語・文学理論研究関係科目は24%、主専攻日本語関係科目は27%、英語関係科目は8%を取ることが分かる。

次に、日本語・日本文学関係科目の4年間の時間数を見てみよう。

主専攻関係科目時間数（第一外国語）（四年間）

1)　日本語（実践コース）－1049時間
2)　日本語の音声学－34時間
3)　日本語史－39時間
4)　日本語の文法論－30時間
5)　日本語の文体論－26時間
6)　日本語の語彙論－34時間
7)　日本の言語地理学－34時間
8)　日本語の通訳技術－154時間
9)　日本語教授法－34時間
10)　日本文学（時代別）－136時間

合計：1570時間

ウクライナにおける日本語教育が盛んに行われている教育機関の中でキエフ国立大学とキエフ国立言語大学が指導的な役割を果たしている。そのため、キエフ国立大学とキエフ国立言語大学の日本語・日本文学関係科目の時間数を比較してみた。

1)　日本語（実践コース）－2176時間
2)　日本語の音声学－30時間
3)　日本語史－58時間
4)　日本語の文体論－68時間
5)　日本の言語地理学－60時間
6)　日本語の通訳技術－274時間
7)　日本文学－30時間

合計：2696時間

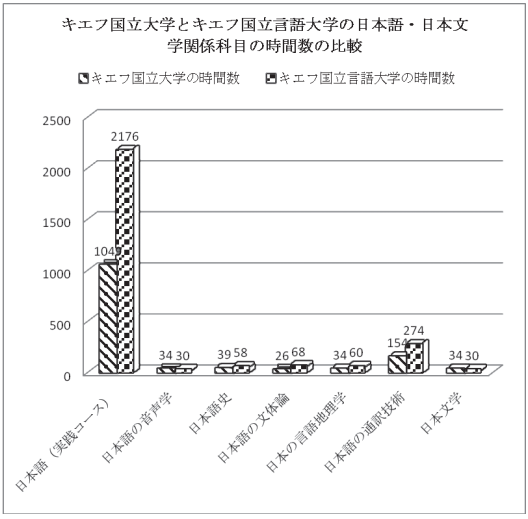
結果をグラフに示すと次のようになる。

以上のことからキエフ言語大学の学習者がキエフ国立大学の学習者より1126時間多く日本語関係科目を受けることが明らかである。

それを知っており、認定することだけで何も変わらないので、キエフ国立大学のカリキュラムを改善する方法を見つけることはキエフ国立大学における日本語教育のあり方を考え直すために不可欠な条件である。しかし、キエフ国立大学でカリキュラムを変えることは決して簡単なことではない。日本の場合、筆者が知っている限り、外国語教育の場合、各々大学側は学習者のニーズ分析やレディネス分析の上でカリキュラムを作成することは普通なパタンであるが、ウクライナの場合はぜんぜん違う状況である。ウクライナの場合、カリキュラムの変更時にさまざまな困難が出てしまうことは確かになっている。まず、教育省が普通教育関係科目を主科目として定めることはある意味ではカリキュラムの内容を限定すると思われている。

しかし、去年の11月に言語学院で教えられている東洋言語関係の三つの講座の講座長をはじめとし、筆者も含め、多くの教師が以上の傾向を終わらせるため、285人の学習者にアンケート調査を行った。そのアンケートの詳しい内容を時間の限定で見逃すが、アンケート結果をうまく利用し、カリキュラムの改善に繋がったことを紹介する。

グラフ4



第一の改善は1年生の日本語の実践コースの時間数を72時間に増やし、生態学という科目を廃止することである。

第二の改善は2年生の言語コミュニケーション論基礎という科目を廃止し、その代わりに日本歴史という科目をカリキュラムに入れることである。

第三の改善は4年生の日本語・日本文学教授法という科目は72時間に増やし、英語の言語地理学という科目をするということである。

第四の改善は、5年生のウクライナ語という科目を廃止し、日本語の時間数を72時間に増やすということである。

今後の課題は、ウクライナの教育省が東洋言語と西洋言語のカリキュラムを区別するように「ウクライナの高等教育機関における日本語教授法のコースデザイン」というテーマで博士学位を取得し、東洋言語カリキュラムを教育省のレベルで可決することになっています。

1. アサドチフ・オクサーナ　タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学におけるトピック・シラバスを取り入れた初級授業の改善と教材開発－「自己表現」を目指した口頭能力の養成のために－『日本語教育指導者養成プログラム論集』第３号、政策研究大学院大学、国際交流基金日本語国際センター、国立国語研究所. － 2004. － P.1－35.